Pestalozziの体育思想について（1）

――基礎陶冶の理念から――

坂入　明

Thought of Physical Education of J. H. Pestalozzi (1)

―― *über die Idee der Elementarbildung* ――

Akira SAKAIRI

〔内容抄録〕

近代体育思想の形成過程のなかで所謂教育思想家と呼ばれる人々，すなわち，モンテーニュ，ロック，ルソー等の果した役割についてわれわれはさまざまな論述を得ている。しかし，このような流れのなかでわれわれは，青年時代にルソーから政治的，社会的，教育的問題のさまざまな影響を受け，そのルソーの教育思想を自己自身のものとして確立し，そして教育実践を試みた民衆教育家ペスタロッチの存在をけして忘れることはできない。特に，彼の遺した厖大な教育著作のなかで，他の教育思想家の誰よりも彼の教育思想の中に明快に体育を位置づけた点に注目すべきである。

ペスタロッチによれば，当時の歴史的，社会的そして教育的状況から考え，民衆教育とりわけその身体陶冶は必要不可欠な急を要する問題であった。なぜなら上流階級の子弟においては，習慣や「技術の虚飾」等によって身体的堕落化が及んでいるといっても，休養や適度な栄養があるが，一方，貧民子弟においては身体無視の貧弱な 3 R's の教育が行われており，特にマニュファクチュア産業の侵入によって，身体の悪化に一層拍車がかけられる状況であった。そこで彼は教育にあたって，道徳的(心臓)，精神的(頭)，身体的（手）の本質的調和を考え，その方法として子どもの自然で自由な「活動衝動」を重視する等の合自然の教育を実施するという「基礎陶冶の理念」を確立した。そして，彼のこのような教育や体育についての考え方は，まず家庭における身近で，暖かい母とのやりとりから出発し，子どもの生活場面における活動によって子どもは陶冶されるとする，「生活が陶冶する」の思想へと結実するものであった。

I

ルネサンス以降，子どもの教育に際して全面発達の見地から，からだにその目が向けられてくる事実の次第な高まりを，われわれは教育や体育の通史のなかに明らかに認めることができる。なかでも，モンテーニュ（M. Montaigne, 1533—1592），ロック（J. Locke, 1632—1704），ルソー（J. J. Rousseau, 1712—1778）といった教育思想家といわれる人々の教育論のなかに，近代的体育教育の思想の発展的深化の足跡をわれわれは明確に認めることができる。このような史的流れのなかにあって，青年時代ルソーによって社会的，政治的，教育的関心へのめざめを受け，次第にその影響を克服し，自己のすぐれた教育理念を形成し，且つ生涯子どもの父として教育実践を試みた民衆教育家ペスタロッチ（Johan Heinrich Pestalozzi, 1746—1827），の存在をわれわれは忘れることは

できない。

そこで本小論はペスタロッチの教育思想のなかにみられる彼の体育観についてとりあげることにする。その場合重要となることは，彼が人間性の諸力の全的陶冶をめざし，心情力（Herzenkraft）：心臓，精神力（Geistkraft）：頭，技術力（Kunstkraft）：手の本質的な調和的教育を主張したことである。特に，広い意味で身体陶冶（Körperbildung）を意味する技術論と身体教育（体育）とのかかわりを解明することは，ペスタロッチの体育思想を理解するうえでの重要な鍵になると思われる。また同時に，ある意味で19世紀末から所謂従来のシュピース方式に対して勃興してくる自然主義体育（Natürliches Turnen）への理念をすでに宿している，ペスタロッチの合自然の教育原理による彼の自然体育（Naturgymnastik）の解明も彼の体育思想究明の重要な基本問題となると思われる。そこで筆者はもっぱら彼が体育教育について述べている「身体訓練の順序における基礎体育の試みの入門としての身体陶冶について[1]」（Über körperbildung als Einleitung auf den Versuch einer Elementargymnastik, in einer Reihenfolge körperliche Übungen, 1807）〔以下「体育論」と略記〕を本研究の基礎としながらも，教育史上他のいかなる教育思想家よりも体育を彼の教育（学）の大系のなかに明確に位置づけたと思われるペスタロッチの体育についての思想を，主著「ゲルトルートはいかにしてその子を教うるか」（Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, 1801），「基礎陶冶の理念について」（Über die Idee der Elementarbildung, 1809），「白鳥の歌」（Schwanengesang, 1826），「隠者の夕暮」（Abendstunde eines Einsiedlers, 1780）等にみられる教育思想やこれらにおいて散見できる彼の体育思想に手がかりを求めて，ペスタロッチの体育論を分析整理することにする。また，これらのペスタロッチのすぐれて社会的な教育論にみられる体育の問題を探究することは近代体育思想の成立過程の究明の重要な手がかりとなるであろう。

Ⅱ

畢生貧民教育と初等教育の改革に「すべてを他人のためにし，己れには何ものも[2]」と，献身したペスタロッチにあっても教育家を志すまでには四転の推移があった。つまり，最初は敬虔な信仰と貧民救済に尽力した祖父アンドレーアス・ペスタロッチの感化を受け牧師になろうと神学の研究に向った。次に，チューリッヒ共和国の憲法に逆行する封建的で，腐敗した権力政治から農民階級の悲惨な生活を解放しようと法律家になるべく法律学の学生として，チューリッヒの大学(Collegium humanitatis）に入学した。ところが，政治学のボードマー教授等の影響，加えてジュネーブの同国人ルソーの「エミール」（Émiel, ou de l'éducation, 1762）と「社会契約論」（Du Contrat social, 1762）に対するパリ議会に倣ったジュネーブ共和国の断罪は若きペスタロッチ等学生を一層権力批判へと駆り立てた。この間の思想的状況はきわめて辛辣な政治的諷刺を含んだ処女作「アギス」（Agis, 1766）に託されているとおりである。かくして彼らの機関誌「警醒者」（Der Erinnerer）の発禁，ペスタロッチを含む多数の関係学生の逮捕によって，彼の公的将来は不可能となり，ペスタロッチは法律家になることを断念した。そして，当時ルソー等の影響もあって青年達の間でユートピアとなっていた，農業経営によって貧民階級の救済を試みることになった。やがてアンナ・シュルテス（Anna Schulthess）との結婚，長男ヤコブ（Jacob）の誕生となった。この間続けられた実験的農業をさらに拡大してノイホフの農場へと家族と共に移り住むことになったが，ここでの経営は失敗に終った。こうする間にもペスタロッチは，ルソーの「エミール」に導かれながらもヤコブの育児の経験を経て「育児日記」を書きながら教育の原理や方法の探求へと向った。同時にノイホフの農場で新たに貧民児童を収容して，働かせながら教育を施す新しい学校をつくる構想を練

っていた。そして彼は近隣から若干の，時には25～80人もの不健康で，不道徳で，知能低劣な浮浪児を集めて，いよいよノイホフ（Neuhof：新しい農場）の貧民学校の経営に着手し始めることになった[3]。こうして言葉の正しい意味での汎愛教育家ペスタロッチは教育による社会の改造，民衆の救済という彼の天職を得てその実践を開始したのであるが，同時にこのことは彼にとって長い受難の道への第一歩を踏み出すこととなったのである。このようにしてノイホフにおいて，手工作業（労働）と教育との結合を計ることによって下層貧児の経済的自活を試みたのであるが，結局経営的な行詰まりによって，閉鎖のやむなきにいたり，これも失敗に終ったのである。しかしこの教育実践の経験を生かして，温情豊かな無二の親友「人類誌」（Ephemeridem der Menschheit）の編集者イーゼリンの薦めもあって一時著述活動に専念することになった。かくして，冒頭の有名な「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても同じ人間，その本質からみた人間，一体彼は何であるか[4]」で始まる「隠者の夕暮」が出版されることになった。この著作こそ教育学作家としてのペスタロッチの処女作であり，人類教育史上に輝く教育学の予言書となったのである。

ところでペスタロッチの教育思想は「隠者の夕暮」に発して再び「隠者の夕暮」に還る[5]といわれているように，後に彼によって展開される崇高な教育思想のすべての萌芽が，この語録風の著作の中に宿されているといっても過言ではないのである。つまり，当時広く流布されていたバゼドウ（J. B. Basedow）に代表される汎愛派教育の人為的な方法に対して，「教授を心理化」するというペスタロッチは「人間陶冶の根底に置かれる言葉のやり取りと流行の教育法との幾千の小技巧，これらすべては骨折りながら，しかも人を導いて自然の道から外らせる[6]」と卒直な教育批判を浴びせている。また，後に「ゲルトルートはいかにしてその子を教うるか」の中で組織だてられる人間の全的陶冶を目ざす，基礎陶冶の理念である心情，精神，技術の調和的教育の考え方がすでにあらわれている。すなわち彼によれば，「人間性のこれらの内面的諸力を純粋の人間の智慧にまで一般的に向上させることは，最も賤しい人々にとってすら陶冶の一般的目的[7]」になるものであると考えられていた。すべての人間に平等に存する人間性の内面的諸力を調和的に教育することは彼の教育実践の基調となったのである。同時にこのような教育こそ彼の理想とする合自然の教育原則に従うものであり，この自然の教育を推進することについても，すでに初期の作品である「隠者の夕暮」のなかにその主張が見られる。すなわち「自然の力よ，人類の純粋の陶冶よ，汝は一体どこにいるのか[8]」と述べて，彼が生涯探求しつづけた自然の教育についての披瀝をわれわれはこの著の中に窺いとれるのである。さらに，このような教育はまず家庭の父母の暖い愛情のもとでの生活のなかから，とりわけ家事労働や農工作業の手伝いを子ども達が行うところからその第一歩が始まるとペスタロッチは考えて，「人類の家庭的関係は最初の且つまた最も優れた自然の関係だ[9]」と述べている。このような「居間の教育」こそ後に，彼の教育の根本原理となった「生活が陶冶する」（Das Leben bildet）という思想へと結実するものであった。このように人類愛に燃えるペスタロッチは，教育的階級性を打破し，教育の門戸を広く国民一般へと解放しようと努力したのである。このことについて彼が，「わたしはもともとわたしたちの企図によって，家庭教育のもつ長所は学校教育によって模倣されなければならないということ，また後者は前者を模倣することによって初めて人類に何か貢献するということを証明しようと思った[10]」と述べているところからもわれわれは理解できるこのように，ペスタロッチが家庭教育のよさを学校教育の中へ持ちこもうと考えたことは，彼の教育的な基本姿勢の現われでもあった。このような学習と労働または学校と仕事場との一体化こそ，ペスタロッチの得意とした教育の考え方であったし，それはまたせまりくるマニュファクチュア産業の時代的要請でもあった。このような歴史的状況の下で，国民を教育によって自由にし，

社会的経済的安定を与えることは，国民教育の必要条件でもあった。当時のヨーロッパの専制君主の封建社会のもとで犠牲にされていた国民大衆，とりわけ，農民が土地を追われて，マニュファクチュア的労働者になっていった状況について次のように，アダム・スミス(Smith Adam, 1723—1790) が「国富論」(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776) の中で先進イギリスでの状況について述べている。すなわち「分業が発達すると，労働によって生活する人々，つまり人民の大多数の仕事は，少数のごく単純な作業にかぎられる。ところが，大部分の人々の理解力というものは，日常の仕事によって必然的に形成されるものである。一生涯少数の単純作業を繰り返している人は，人間として可能なかぎり，愚かで無知になり，感情も荒れ，私生活上の日常の義務や国の利害についても正しい判断がもてなくなる。……一般民衆は教育にさく時間がない。子供は働けるようになるやいなや，パンをかせぎに出る。その仕事も単純で長時間の肉体労働であり，余暇はほとんどない[11]」という状態は後進スイスにおいても同様であった[12]。このように農民の間に侵入してきたマニュファクチュア産業によってもたらされた商工社会との接触により，暖い家庭は破壊され，一般国民大衆は社会的にも知的にも道徳的にも，疲弊し彼らの生活状態は変貌の一途をたどった。このような社会的状況において，農民の子弟にとって，将来の生活や職業の安定のためには基礎的教育が不可欠であった。さらにこのような「時代精神」による身体的虚弱化，不具化は，加えて身体無視の当時の綴り字学校，書き方学校によって拍車をかけられているとペスタロッチが批判を述べている[13] とおりである。だからペスタロッチは人間の教育にあたって全面的陶冶をうったえて，彼の教育実践の原則について「基礎陶冶の理念とは，人間の心情，人間の精神，および人間の技術の諸能力と素質とを合自然的に発展し形成する理念のことである[14]」と端的に述べて，調和的教育の重要性をくりかえし主張している。また「生活が陶冶する」という教育スローガンを掲げたペスタロッチは「自然は人類の力をすべて練習によって繰り広げる。そしてそれらの力は使用することによって成長する[15]」と知行一体の教育観について述べている。これは流行の机や本にかじりついた教育ではなく，児童の内面的な活動衝動を満足させ，自己活動を教育のなかへとりいれる経験主義の教育こそ，こどもの教育を考える場合の重要な基本的事柄であるとペスタロッチが考えていたからである。

われわれはこれまでペスタロッチの教育思想の基本的特徴について，歴史的社会的背景とのかかわりを通しながらその概略の把握を試みてきた。その結果われわれは，ペスタロッチの「基礎陶冶の教育理念」の中にこそ，人間の教育について考察する場合けして無視できない，身体や体育についての問題があり，それを彼が明確に意識して彼のすぐれた教育思想の中へ基礎づけていることをわれわれははっきりと理解したのである。

そこでわれわれは次に，ペスタロッチの教育思想にみられる体育の問題について，彼の主張に従って若干考察を加えてみよう。ペスタロッチが子どもの教育に際して身体の教育を重視していることはすでに述べたのであるが，「体育論」の中で彼は次のような主張をしている。すなわち，「人間の身体が人間の心と同様に，その素質を発展させるための手段を必要とするということは，一見して明らかである。実際，われわれの時代の人間の身体陶冶の重要性は，人間陶冶の重要さよりもほとんど一般により大きいほどだといってよい——なるほどそれは民衆教育において，いわんや大衆によって正しく承認されてはいないけれども。身体陶冶は健康を与え，生活を維持し衆にぬきんでるための手段を与え，自負を与え，地位を与え，品位を与え，勇気を与え，そして多くの病気に対する予防対策であることを人々は知っている。だから身体陶冶は必要不可欠の，快適な技術である[16]」と述べている。このように重要な身体陶冶についての原理や方法に対してさまざまな改革

や新しい努力がなされているにもかかわらず，「直ちに明らかになることは，人々が自分自身の身体的配慮において進歩していると信じ，またそれへの関心を自負しているほどには，われわれは身体陶冶の必要を一般的にとは言わないが，特に十分満足させるまでには高められていないことである[17]」,「人々はただ，文明化された世界の人たちの行為を，身体的観点から少し詳細に注目しさえすればよい。そうすれば身体陶冶の現今の技術は習慣化された行為に落ちこんで，人間自身を忘れてしまい，ここかしこで人間をして低級な遊びの奇術にまで逸脱していることを人々はたしかに発見するにちがいないし，また それ以外のことは 何も発見できないだろう[18]」と彼は述べている。というのはまず上流階級の人々の身体陶冶についてみてみると，「絶対に正常には歩行できない舞踏家，泳ぐことのできない剣術士，自分の生活のためにはひとすじの草をも刈りとることのできない登山家，そして太鼓を打つためにからざおを自分の手と指とでもってはいるが，脱穀のためにそのからざおや腕に拍子を合わすことは永遠にできないような鼓手であって，それ以外は何も見当らないのだ[19]」，そして「人々は子供自身の内面にあるものから出発しなくて，外面的な個々特殊な技能の虚飾から出発するからだ。これらの個々の孤立的な技能の教師，つまり舞踏教師，剣術教師，騎馬教師は存在している。体操の教師でさえ，彼が同時に，人間本性の身体的諸力をそれの全範囲にわたって純粋に発展させる心理学的育成者であるよりも，より以上に個別的に跳躍者であり，攀登者であり，軽業師だった。このような身体陶冶はだから必然的に，人間本性の全体，すなわち道徳的本質と知的素質との関連においては達成されえなかった。人々は身体陶冶を単に個々の場合に対する個々の子供に対する舞踏，撃剣，乗馬の訓練として捉えて，舞踏，撃剣，乗馬などのこれらの訓練を，子供に彼らの身体的素質の全体から，確実にそして独自に出発するものとしては与えず，またすべての身体的な力の訓練と関連し調和するものとして考えてもいなかった[20]」 結果であるとペスタロッチはきめつけている。しかし文明化された「一般に上流社会の人々は身体的には――衰えない。彼らは一般によき成長のための確実な手段をもっている。そこには運動があり，適当な栄養がある。……そこにはあらゆる寒さや困難に抗する手段がある[21]」が，しかし，より一層悲惨な状態は貧民大衆においてである。つまり，「彼らは精神的に不具化されているのと同様に，身体的にも不具化されている[21]」，「多くの場所では土地があまりにも高価であり，またあまりにも課税が高いので，貧民は容易に，また安心してそこで暮らしていくこともできない。土地の租税は，いたるところでもはや調達困難な事態にたちいたっている。こうして身に食い入る心労と困窮とは貧民の身体を，それがわれわれ父親の時代にわれわれの父親の身体を苦しめたよりいっそう多方面にわたっている[22]」と。

そこでこのような結果の最大の原因の一つは，われわれの時代の学校教育の欠陥にあり，もう一つの原因は，迫り来たマニュファクチュア産業の侵入に起因していると彼は考えて考察を進めている。つまり，「ヨーロッパの大衆を去勢する学校の害悪をただ糊塗するだけではなくて，進んでその根源を救済しよう[23]」と考えてペスタロッチは，「わたしはこうした教育制度の欠陥について黙しているわけにはゆかない。悪魔がわが時代に贈ったおそらく最も恐るべき贈物は，実に技能を欠いた知識だ。感覚的な人間よ！お前は多くのものを必要とし，いっさいのものを欲する存在で，自己の欲求と必要とのために知りかつ考えなければならなかった。だがお前はまさにこの必要と欲求とのためにまた実行しなければならなかった。思考と実行とはあたかも小川と泉のように，一方が止まれば他方も止まり，またその逆でもあるといった密接な関係を保たなくてはならない[25]」，「われわれの諸学校は，それらが民衆の精神力と心情力との陶冶手段でなくてはならないのだが，それと同じく民衆の身体的な力と身体的熟練との陶冶手段ともなっているだろうか，子供はそこにおい

て身体的運動と力の使用とにまで彼の本性の衝動を適切に満たす事ができているだろうか。実際――子供は学校へ行き，家庭に帰っている限りでは運動している。しかし学校のなかで子供は辛うじて息をつくことができているほどである。そこでは子供の心に対してなされる事がらが非常に不自然な重みをもって，子供の手や足の僅かな運動さえも貧しい学校教師には彼の日常生活の仕事の軌道からしめ出されている。学校に坐っていることは，知らず知らずのうちに，人間の本性を最も優れて，また最も美わしく陶冶できる時期に，その人間本性の身体的諸力を不自然にし，不活発にし，またその衰弱を誘発するような暴力的で人為的な訓練となりさがっている[26]」と述べている。

このような飢餓と欠乏，これと並んで民衆学校における悲惨，しかしさらに加えて「国の貧民の骨髄を蝕み，また彼らの血肉を食いつくしているのはただそれだけではない[27]」，先に先進イギリスの例を示したように迫り来るマニュファクチュアの工場制労働こそ，民衆の身体の畸型化，不具化をひきおこしている張本人である。つまり，「国のなかにある産業が，これらすべてのものよりもより多く，われわれの民衆の身体の力を食いつくしている。――少年よ，煉瓦製造台のそばに立ちなさい。少年よ，糸引車か織機の上に坐りなさい。朝から晩まであなたは塗料を塗りなさい。朝から晩まであなたの車を回しなさい。朝から晩まであなたの針で縫いなさい。そうすればわたしはあなたに農夫や農婦が鍬で耕やすことによってはとても得られないほどの賃金を支払ってやろう。――とわれわれの貧民に対してこう語る人々が，4,50年来，ますます多くなってきた。しかし彼らは貧民に対して次のようには決して言わなかった。あなたがたはその際，こんな一面的な行動をして不具者か，病弱者になるのだよと。また彼らは貧民に向かって次のことも言わなかった。もし印捺更紗の工場が好況に恵まれなくなったり，また紡績機械が発明されたり，また縫い取り仕事が時代おくれになったりしたら，あなたはあなたの曲がった手，あなたの衰弱した肉体，あなたの坐業し過ぎた下腹部をもってしては，もはやつるはしや斧を手にすることもできないし，他の工場で働くこともできなくなるのだよと。こうなるとあなたは生涯完全な一人の飢える乞食なのだ。あなたは徒弟として修業したことの外は何もなすことができない。あなたはあなたの一般的な身体力とその発達とを，一面的で不具な技能やそれらのもたらす見せかけの利得の犠牲に供してしまったのだ。……こうして腐敗したすべての事態が，両親によってなおも未成熟の子供達まで仕事台や仕事机，機械へと追いやった。このような悲惨な状態で，子供たちの衰弱はどんなになっただろうか。……貧しい子供たちは，多くの場所で，悲惨な教室によってすでに工場での悲惨な生活のために準備されていた。両親たちは子供をその教室から奪い去って，少なくとも自分たちの生活の糧が何ほどか得られる工場へと彼らをかりたてた[28]」のである。

このような祖国の民衆，特に貧民児童の生活や教育状況のなかで，真の教育的身体陶冶を施すことによって貧児を救済するということがペスタロッチの「体育論」出現の背景でもあったし，それの根本テーマでもあった。したがって，民衆のこのような身体的悲惨さを救済する方法こそ，人間性の本質的内容である心情，精神および技術の諸能力と素質を合自然的に発達させ，形成する「基礎陶冶の理念」であったのである。すなわち，ペスタロッチは「身体的技能の発達のための技術陶冶は，このような高き相互関連によって，人間本質のいっさいの諸力を普遍的に生かすことを教えるものでなくてはならない。かかる技術陶冶は人間を身体的に発達させることだけで満足すべきではない。それは彼の身体的発達を，自然がなすのとまったく同じように，知的ならびに道徳的発達に完全に調和させなくてはならない[29]」，そして「子供は本来，わかちがたい全体として，心臓，精神，身体の多面的素質による本質的な有機的な統一体として存在している。自然はこの素質のうちのどれかを未発達のままにしておくことは決して決意などしない。――自然が働くところ，子供

が純粋にそして忠実に自然によって導かれるところ，そこでは自然は子供の心臓と子供の精神と子供の身体の素質を同時に調和的統一的に発達させる[30]」ような教育，すなわちこれを楽器にたとえるならば「ちょうど一つの楽器で正確に調えられた一弦が，調和的に調えられた他の諸弦を同時に鳴らす[31]」ような教育方法を求めていたのである。

また，合自然の教育による体育の方法についてもペスタロッチは，「自然が感覚的な必要や欲求のあらゆる刺激の根底においているものは――自然が感覚的発達の中心点として子供自身のなかにあらわれるのはこの根底に由来しているからであるが――活動に向かう子供自身の衝動に外ならない。彼の手はあらゆるものを口に運ぶ。彼の足は絶えまなく動いている。彼はみずからを賭し，いっさいをかける。彼はあらゆるものを捉えようとするとともに，すべてのものを投げ捨てもする。運動へのこの絶え間なき努力のうちに，みずからの身体を賭しての子供のかかる活動のうちに，自然は身体的技術的陶冶の真の出発点，つまり身体陶冶についての純粋な，基礎的な，完全な見解に達するための導きの紐を与えている[32]」と述べている。またペスタロッチは「基礎陶冶の合自然性は一般に，その手段を極度に単純化することを要求する[33]」ものであると考え，「身体的基礎陶冶の出発点は，この点で，それが本来一つの技術だとはとても思えないほどきわめて容易に，きわめて簡単に，きわめて一般的に応用されることができる。最高の単純性がそれである。どんな母親もすべてそれを知っており，母親はすべてそれを活動させるのだ。母親は彼女の子供をまず第一に机の上に，腰掛の上に立たせる。母親は子供を両腕に抱きかかえる。次いで母親は子供を地面の上に置く。子供を片手だけで支える。ついで一本の指だけで支える。子供は立つ，次いで母親のところへ歩いてゆかなくてはならない。子供はこれが辛うじてできる。すると次に母親の膝の上にも立たなくてはならない。子供は母親にうなずいてみせなくてはならない。子供は母親の方に体を曲げ，彼女にお辞儀をしなくてはならない。父親はさらに向こうへ進んでゆく。彼は子供を両脚で彼の靴の上に置き，この位置で子供を前後左右に動かし。親は木の台を部屋のなかへ置く。子供たちはその上へ飛び上がったり，それを飛び越えたりしなくてはならない。その後，子供は父親にしたがって木に攀じ登らなくてはならない。子供は父親にしたがって氷の上を滑らなくてはならない。父親は子供に円を描かせる。父親は子供に毬を投げさせる。笞を振り回させる等々。……父親や母親のこのような行為が，子供の身体的発達にとって決して一面的なものでないことは明らかなことだ。子供が，彼の身体構造の法則にしたがって，全面的な運動能力や技能にまで高められることは，明らかに子供の本質にもとづいている。腕と脛，手と足，すべての関節と筋肉とは，あれこれの仕方で調和的に，そして無意識ではあるが，しかしそれ故に必然的なつながりのなかで訓練され，活動させられその結果，身体全体が彼の四肢とともに強さと耐久力，精力と活力とを増大してゆくのだ[34]」と述べている。このような子どもの生活の中に存在する技術のＡＢＣは，「一般的な術の諸規則であって，これらもろもろの規則に従うなら，児童は最も単純な技能から最も複雑な技能へと漸次進歩を遂げつつ，彼らが身につけることを必要とするあらゆる技能を日々ますます容易に獲得することができるように，物理的な確実さをもって作用する一連の訓練によって陶冶されることができる。……このＡＢＣは最も複雑な人間の技能の基礎を含んだ身体的諸力の最も単純な表現から出発しなくてはならない。打つ，運ぶ，投げる，押す，引く，回す，捩る，振り回す等々は，われわれの身体的諸力の単純な表現として最も顕著なものだ。これらは相互に本質的に違ってはいるが，しかしすべてが共通にまたそれぞれ独自におよそ人間の職業の基礎となるありとあらゆる，しかも最も複雑なものにさえ及ぶすべての技術の基礎を含んでいる[35]」と，ブルクドルフの下層貧民学校の悪戦苦闘の教育実践を続けた後にようやく，「直観がいっさいの認識の絶対の基礎である[36]」

という直観のＡＢＣを発見したペスタロッチは，身体の陶冶においても合自然の方法に従った技術のＡＢＣの方法を主張している。

以上われわれはペスタロッチの主張に従って彼の教育思想における体育の問題について述べてきたのであるが，これを要するにペスタロッチの「体育論」は，人間教育において身体陶冶がいかに重要であり，必要不可欠であることを訴えたものであるとわれわれは理解できる。しかし一般にはあまりその必要が認識されておらず，ましてその正しい実践はほとんど当時行なわれていなかった。また存在してもそれは技術の一面に走り，人間性の本質を考慮した教育的体育とはなっていなかった。特に，上流階級にあってはまだまだ良かったが，一般民衆に目を向けると，学校教育における欠陥と，なお一層迫りくるマニュファクチュア産業によって民衆の身体が蝕まれていた。だからこそ身体陶冶の正しい教育への導入を切に願ったペスタロッチは，「基礎陶冶の理念」から，人間の全的陶冶，すなわち，心情・精神・身体の本質的調和的教育を訴えたのである。それはまた同時に，人間の自由な活動衝動を生かす合自然の教育原理に従った，彼の合自然の体育の方法として，子供の身近かな家庭生活に出発点を有する家庭の自然的な体育(die häuslishe Naturgymnastik)[37]の主張ともなったのであるとわれわれは理解することができよう。

註

1) 1807年「週報」(Wochenschrift für Menschenbildung) に発表されたペスタロッチのこの「体育論」については，ドイツ体育史家のなかでも当初から論争があり，いまだに未解決の問題がある（「ペスタロッチの基本体操」成田十次郎)，この論文の自由な子どもの活動衝動（der Trieb nach Tätigkeit) を生かそうとするペスタロッチの自筆になる部分と機械的な関節訓練（Gelenksübungen）に中心をおくニーデラーの基礎体育の主張の部分とが不整合である（長田編，ペスタロッチ全集，第11巻，309)，教育によって民衆の救済をはかろうとしたペスタロッチが「体育論」のなかで，本来の自然的な活動衝動を重んじて民衆体育を論じている（M. Streicher, Pestalozzis Einleitung auf der Versuch einer Elementargymnastik, 1962, 3—6)，協力者ニーデラーの関節運動は無味乾燥なものである(B. Saurbier, Geschite der Leibesübungen, 1966, 116）等諸説がある。
2) 長田新編，ペスタロッチ全集，平凡社，第１巻，161，昭和49年第２版
3) Roger de Guimps, Histoire de J. H. Pestalozzi, de sa pansée, et de son oeuvre, 1874, 新堀通也訳，ペスタロッチ伝，学芸図書，7—63，昭和43年
4) 長田新編，ペスタロッチ全集，第１巻，「隠者の夕暮」，369
5) 同上，第１巻，367
6) 同上，第１巻，「隠者の夕暮」，372
7) 同上書，375
8) 同上書，273
9) 同上書，377
10) 同上，第７巻，「シュタンツだより」，12
11) Adam Smith, An Inquiry into the Nature and Couses of the Wealth of Nation, 田添京二訳，「国富論」，中央公論世界の名著31巻，523—4，昭和43年
12) Charles Gilliard, Histoire de La SUISSE, 江口清訳，「スイス史」，白水社，89，昭和44年
13) Pestalozzi, Über körperbildung als Einleitung auf den Versuch einer Elementargymnastik, in einer Reihenfolge körperliche Übungen, 12 (Margarete Streicher, Pestalozzis Einleitung auf den Versuch einer Elementargymnastik 所収，KLEINE PÄDAGOGISCHE TEXTE 7, 1962)
14) 上掲，第12巻，「白鳥の歌」，10

15） 同上，第1巻，「隠者の夕暮」，375
16） 同上，第11巻，「体育論」，314
17），18），19） 同上書，315
20） 同上書，316—7
21），22） 同上書，318
23） 同上書，319
24） 同上，第8巻，「メトーデ」，231
25） 同上書，196—7
26） 同上，第11巻，320
27） 同上書，320
28） 同上書，321—2
29） 同上書，332
30） 同上書，325
31） 同上，第10巻，「基礎陶冶の理念について」，208
32） 同上，第11巻，328
33） 同上，第12巻，「白鳥の歌」，32
34） 同上，第11巻，329—30
35） 同上，第8巻，「ゲルトルートはいかにその子を救うるか」，200
36） 同上書，169
37） Margarete Streicher, Pestalozzis Einleitung auf den Versuch einer Elementargymnastik, 21